
就活中の彼女とつきあう方法

あるみ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

就活中の彼女とつきあう方法

【コード】

N1473D

【作者名】

あるみ

【あらすじ】

春の夜。就職活動に行き詰まって飲んだくれる彼女と大学生活満喫中の年下の彼氏が顔を合わせた。

(前書き)

下ネタだめな方は注意が必要です！

そろそろ俺もインターンとかしなきゃだめかなあと思いながらチヤリンコを飛ばしていた初ゼミ飲み^{おんなのこ}の帰り道、原宿の駅前でサークルの後輩にたまたまばったり出くわした。

下心をパンツの中に隠して夜の代々木公園を並んで歩いているうちに酒の回りの遅い俺はぐでんぐでんになっていて、それでも全然平気なふりで調子に乗って女の子の荷物まで持ってあげてた。韓流スターか俺は。

最近サークル内でできた新しいカップルの話とか先月のスノボ合宿のときに雪の中で花火した思い出話とか来週の新入生勧誘花見バーベキューの話とか新学期に履修する講義の話やなんかで盛り上がって、どうせだから今日はもう俺んちでオールしちゃおうよと大声で言った瞬間、冬枯れた公園のベンチで熱爛^{あつかん}すすって泣きべそかいてるオヤジみたいなりクルーターと目が合った。

「あ」

お互いがお互いを認識し合うと、彼女は食い倒れ人形とかいつこく堂とかみたいに呆然としたままカクつと下顎を下げ、俺は隠れる場所を探して左右に目を走らせた。

「先輩の彼女さんですかあ？」

空気の読める可愛い可愛い後輩が首をかしげ、黒目がちな大きな目をパチパチとしばいた。俺は胸がきゅんとする。なんてきれいにマスカラを塗る子なんだ君は。

それに比べて目の前の俺の彼女ときたら、就職試験の面接のため

とはいえ、とりあえず引つつめました的な髪に、とりあえず描きま
した的な眉毛、とりあえず塗りまされた的なアイメイクにとりあえず
着けました的なグロス、しかも泣きまくりの酔いまくりだから不細
工なことこの上ない。十二月から毎日のように着ているリクルート
スーツもだいぶくたびれてきていた。

「え、お、おうん」

うなずいたものの、はつきり言って二個上の俺の彼女は人様に紹
介できるような女でわない。

俺はとっ散らかした自分の部屋を不意打ちで見られたような気分
だった。

それでも無視して通り過ぎるわけにもいかず、恐る恐る、俺は彼
女に訊ねた。右手は自然と後輩のカバンを背中に隠してる。

「何やってんの、アナタ」

もしかしたら、それは彼女のセリフだったのかもしれない。

けれど彼女は泣き腫らした目で俺を見上げ、それから「ん！」と
言って人差し指でNHKホールの屋根をさす。

俺は額を押さえた。

よりによってNHKかよ！大手にも程があんだろっがよ！

「ちよつとおねいさん」

就職内定が取れないとか言って一ヶ月も二ヶ月も俺のことを放っ
ておきながら相変わらずの大手志向ですか、しかもマスコミ志望な
んて聞いてないですが、この前は食品会社が良いって言ってる日本
ハムとかサツポロ一番とかブルボンとか黄桜とかの会社説明会に行
ってませんでしたかああああ！

言いたいことは山ほどあったけど後輩の前でぶち切れるわけにも
いかず、俺は目の前の惨状を処理することから始めた。

「就職活動に行き詰って自暴自棄になんのも分かりませんが、
こおんなどで股あ開いて座って、酔っ払ってちゃ駄目でしょうが
年頃の若い娘が」

ところが、できるだけ穏便に済ませようとしている俺の神経を逆な
でするかのように、彼女は両脚をばたさせながら顔を膨らませ
た。小学生かおまえは。

「若くないもん。あたし、もう枯れ果ててるもん」

自分で言うな。自覚があるなら努力しろ。めんどくせえ。

彼女のはちやめちやぶりに怯みもせず、完璧な後輩は俺の背中か
ら自分の荷物をそっと受け取り、さりげなく俺と距離を置いた。

「先輩、あたしはこれで帰りますから。彼女さん、失礼します」

ぴよこんと頭を下げ、愛くるしい後輩は踵を返して駆け出した。

「あーあー、逃げられたー。やらせてくれる子に逃げられたー」

適当な節をつけて歌う彼女は俺以上に酔ってる。

俺は数週間ぶりに会った彼女を見下し、その小さな手から熱爛の
カップを奪いとった。

俺の彼女は俺より二つ年上で、でも去年、なんでアイルランド？イギリスじゃないの？しかも何故このタイミングで？と方々から言われながら語学留学して留年したから学年は一つしか変わらない。

大学に入りたての頃に合コンした他大学の女の子の友達友達でお茶の水女子大学なんてとこに通ってるからどんなお嬢様だろう、うっしっしっしと思つて付き合い始めたらこんな女だった。大学の名前に惑わされてはいけない。

「やっぱ、面接でアイリッシュダンス踊ったのがまずかつたかなあ
あ」

ぼろいベンチの背もたれと彼女の体の間に滑り込み、紺色のリクルートスーツを後ろから跨ぐみたいに俺は彼女にしがみついて座つた。

春の夜はまだ寒いから、彼女の背中中は温かった。

「へえ、アイリッシュダンス？」

適当に相槌あいづちを打ちながら、俺は彼女の胸をもむ。

スーツの上から触つてもあんまり楽しくないんだけど、ここで服の中に手をつまむわけにもいかない。公園にはまだちらほら人影が見えていた。

「知らないの？タイタニックでデカプリオが踊ってたじゃん」

一年間語学留学しておきながらデカプリオと言えないオバチャンみたいな彼女は就活用の黒いパンプスの裏をたかたかと鳴らし、さりげないしぐさで俺の両手を自分の胸からはがす。

ここ二ヶ月間、彼女はずっと生理中だ。もちろん本当に生理なわけはなく、それは明らかに俺んちに来たくないがためのいいわけで、俺たちの間では熟年夫婦ばりのセックスレスが続いている。

俺はぜんぜん傷ついてないフリでアナタそりやまずいでしょと言いつつ彼女の肩にあごをのせた。

今日もやらせてくれないのかと思うと彼女も彼女の話も何だかどうでも良くなつて、間もなく俺はすさまじい眠気に襲われた。やばいな、飲みすぎたなこれ。

会社説明会で社員にこんなこと言われたとかエントリースhirtでこんなこと書かされたとか面接でこんな失敗したとか、彼女がそんな話をするのを遠くで聞きながら、数十秒、もしかしたら数十分、俺はまどろんだ。

はっとして目を開けると彼女は平然と俺を顧みた。

「帰ろっか」

浮気の現場に出くわしたとか、話の途中で居眠りしてしまったこととか、彼女は俺の都合の悪いことを決して口に出さない。

ベッドの下に隠したエロ本を掃除のついでにきちんと本棚に並べてくれる八八オヤのごとく、俺の部屋で浮気の痕跡を見つけても彼女は黙っている。それどころか汚れたシーツを洗い、ゴミ箱のティッシュを捨て、一度は、浮気三昧で底を突きそうなゴムを買い足してくれたこともあった。その時はさすがにやる気が失せたけど。

それが彼女の陰険な嫌味なのかどうかは分からないが、友達に言ったらおまえの彼女は変だと言われた。俺もそう思う。正直、後ろ暗くてやりにくいのだ。

「ねえ、別れた方がいいよ」

しばらく黙りこくっていた彼女は公園の出口で突然そう言って顔を上げた。

五部咲きの桜の老木の下で、彼女のリクルートスーツが可憐に一回転する。

「そうしようよ」

俺を見上げた彼女の目が涙できらきら光ってた。

彼女がいつもよりきれいに見えるのは、公園の外灯が遠いからに違いない。

「なんで」

俺は気まずい気持ちだとか、わけの分からない彼女へのストレスだとか、そんなもんは全部忘れ去ってた。

「この分だと、あたし、夏までかかるかもしれないもん」

「んなの今さらじゃん」

「君には留学中も迷惑かけたしさ」

「だから今さらなんでしょ、アナタの迷惑なんて」

俺は彼女の両腕をつかんで自分の方へ引き寄せた。

酔っ払ってるから二人ともよれよれで、植え込みの中に尻もちをついた俺の上に彼女がなだれ込む。

彼女は逃げるように身をよじって立ち上がろうとするけどあんまり本気っぽくなくて、俺はすぐに彼女を捕まえた。

もしかして俺のこと試してんのかな。

「俺、ちゃんと待ってるよ。アナタが留学してる間、一年待った男ですよ、俺は」

「それは他にも彼女がいたからでしょ。今だってそうなんですよ」

それ、言われるとどうしようもないんですけど。

「あたしだって、何にも知らないわけじゃないし、何にも思っていないわけじゃないし、君の浮気にもほとほと愛想がつきたんだもん。そんな風に待たれるくらいなら、別れたほうがまだもん」

別れたほうがましだと言って鼻水たらして泣きながら、彼女は俺の首をぎゅっと抱いた。

つかみどころがなくて、俺が何やっても黙ってて、もしかして俺に執着とか関心とかないのかもしれないと疑ってた彼女が、俺への文句を初めて口にした。

良かった、この人、ほんとに俺のこと好きでやんの。
ああ良かった。

「うち行こ」

俺が耳元で言うと、彼女は本気で跳んで逃げた。蛙か。

「だめだめ。今日生理だし」

「うそつけ。てかもう通じねえですよそれ」

立ち上がってジープンの土を払い、俺は彼女ににじり寄る。
彼女は顔の前で両手を交差させ、やけに必死な顔をする。

「だって願懸けしてるんだもん。就活終わるまで男断ちするの」

そういうことだったんですか、願懸けですか、男断ちですか、てか自分の内定獲得のために俺トに多大な我慢を強いるとは何事ですか
ああああ！

いろいろ滅茶苦茶たくさん言いたいことはあったけど、俺はその前にやりたいことを済ませることにした。

「俺じゃなくて酒を断て」

そう言っつてむりやり交わした二ヶ月ぶりのキスは、どっか照れくさくて日本酒の味がして、すっかり大人しくなつてた彼女が反撃に出たのはその数秒後。

「いてえ！」

俺の額に頭突きをかまし、彼女は颯爽と公園を後にする。

「牛丼たべよ、大盛り、つゆたく。それか山頭火のとり肉ラーメン」

ほんとに、どこのオヤジだおまえ。

俺はポケットの中の小銭とアパートの鍵を手でこすりあわせながら彼女に追いつき、リクルートスーツのおしりに股間を押しつけた。

「ドミノピザかピザラかピザハットならおごってやらないこともないですが？」

(後書き)

【あとがき】

お読みいただきありがとうございます！

恋愛小説を書こうとすると下ネタ満載小説になってしまう自分に途方に暮れている作者です。

この、意味不明でプチ陰険な彼女と浮気な彼氏という最凶なカップルの話を楽しんでいたただけたなら幸いです。

ありがとうございました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1473d/>

就活中の彼女とつきあう方法

2009年3月24日09時20分発行